

竈門神社宮司さんの登山案内

宝満山の高さは900メートルくらいで決して低くはありませんが、登山には適していません。また、太宰府町を中心に史跡を探索するにはよい土地です。そして東西から来る鉄道、南北から連なる線路により交通は自在。一兩日程度で観光するにはよいロケーションです。

これは、大正10（1921）年に刊行された、当時の竈門神社宮司大久保千涛による『宝満竈門登山の栞』はしがき中の一文を、現代の表現に直したものです。掲載の図には、現在のJR二日市駅を起点に北に伸びる

「太宰府軌道」の線路が描かれ、終点太宰府駅からは、史跡を散りばめた宝満登山ルートが連なります。巻末の時刻表によると、太宰府軌道の列車運行本数は1時間におよそ1本。二日市―太宰府間は片道15分を要し、朝6時から夜10時までの営業で、当時のややのんびりとした観光旅行の様子が想像されます。

著者の大久保千涛は、ご子孫によると大正9年に竈門神社に赴任、同15年に大阪の枚岡神社へ転出す



るまでの7年間を太宰府で過ごしました。この大久保宮司、なかなかの学者さんでありまして、神道を中心とした宗教論や歴史についての著作多数、太宰府滞在中も4冊を刊行しています。その内のひとつが先の『宝満竈門登山の栞』。貝原益軒『筑前国続風土記』や古

今の詩歌を引きながらの記述は案内書としては圧巻、旧蹟を中心とした宝満山の観光スポットを流麗な文章で紹介していきます。「あゝこの名山！筑前の中央平野の間にて海を抜くこと三千尺。奇岩を骨として怪樹を皮として白雲の表に出現し、靈氣長く久しく凝って西海の重鎮と称せらるる者は、世人のつとに知る所の竈門山、又の名は宝満山である」。この案内書を片手に太宰府の史跡をめぐり、古人が見た風景、大久保宮司が感じた歴史、そして今わたしたちが立つ時代を重ねてみるのも、おもしろいことかもしれません。大久保宮司は太宰府を去る年、彼の太宰府研究の集大成として『太宰府の光』を刊行しました。この中に『宝満竈門登山の栞』も再録されています。